

第一部 断定表現研究序説 15

第一章 江戸語・東京語 17

一. はじめに 17

二. 東京語の前身としての江戸語 17

三. 標準語の基盤としての東京語 38

第二章 断定表現の通時的研究の意味 47

一. はじめに 47

二. 断定表現の定義と種類 47

三. 〈言語外世界〉の原因と〈言語体系〉上の事件 50

四. 終助詞「さ」 51

五. 助動詞「です」 54

六. 終助詞「さ」と助動詞「です」の研究意義 57

第二部 終助詞「さ」の通時的研究 63

第一章 江戸語の終助詞「さ」の機能に関する一考察 65

一. はじめに 65

二. 現代語の終助詞「さ」 65

三. 江戸語の終助詞「さ」 66

四. 丁寧な会話に使用される「さ」 67

五. 江戸語の終助詞「さ」の機能 80

六. 終助詞「さ」の使用者 84

七. おわりに 86

第二章 江戸語の「動詞連用形＋て＋さ」表現形式に関する一試論

——西部待遇表現「動詞連用形＋て＋指定辞」との関係から—— 91

一. はじめに 91

二. 西部待遇表現「動詞連用形＋て＋指定辞」の成立過程 91

三. 江戸の戯作に見る「動詞連用形＋て＋指定辞」の待遇表現法 93

四. 『浮世風呂』に見る「てさ」形式 94

五. 主体の相違から見た「動詞連用形＋て＋指定辞（じや）」待遇表現形式の分類 97

六. 『浮世風呂』に見る「てさ」形式の意味 99

七. 人情本に見る「てさ」形式 101

八. 江戸語の「動詞連用形＋て＋指定辞」待遇表現形式の衰退の原因 102

九. おわりに 104

第三章 終助詞「さ」による反語表現に関して 109

一. はじめに 109

二. 反語表現とは 110

三. 江戸時代の終助詞「さ」の反語表現 111

四. 明治以降の終助詞「さ」の反語表現 115

五. 反語表現における終助詞「さ」の機能 119

六. 終助詞「さ」を伴う反語表現の衰退原因 121

第四章 「ツサ」の意味分析に基づく江戸語の文末表現の特徴 125

一. はじめに 125

二. 「ツサ」形式の意味 126

三. 『浮世風呂』に見る「とさ」の意味 133

四. 江戸語における「伝聞」、「説明」の表現形式 134

五.	江戸語の文末表現の特徴	136
六.	地域語としての江戸語	137
七.	おわりに	138
	「のさ」の一形式「んさ」に関する考察	141
一.	はじめに	141

二.	「んだ」の発生	143
三.	「んさ」の発生	148
四.	「んさ」の消滅理由	150
五.	おわりに	151

第六章

	『浮世風呂』『浮世床』に見る断定辞としての終助詞「よ」の位相	
	——断定辞としての終助詞「さ」との比較から——	155
一.	はじめに	155

二.	現代語の終助詞「よ」	156
三.	江戸語に見る断定「よ」	157
四.	『浮世風呂』『浮世床』に見る終助詞「よ」	158
五.	断定「よ」と断定「さ」の比較	167
六.	おわりに	171

第七章

	江戸語から東京語に至る断定辞としての終助詞「よ」の変遷	
	——断定辞としての終助詞「さ」との比較から——	175
一.	終助詞による断定機能	175

二.	文政から天保年間に見る断定「よ」	176
三.	幕末に見る断定「よ」	179
四.	明治前期に見る断定「よ」	181

第八章

	現代語の終助詞「さ」の機能に関する考察	199
一.	はじめに	199

二.	江戸、明治、大正期の終助詞「さ」	199
三.	昭和の資料に見る終助詞「さ」	201
四.	若い世代の作家に見る終助詞「さ」	212
五.	終助詞「さ」の衰退理由	213
六.	おわりに	215

第三部

助動詞「です」の通時的研究

第一章

	江戸後期口語資料に見る助動詞「です」の意味	219
	——その使い手と語感を通して——	221
一.	はじめに	221

二.	山々亭有人の人情本に見る「です」	221
三.	式亭三馬の作品に見る「です」	234
四.	文化文政期までの「です」の意味	239
五.	文化文政期までの「です」と幕末の「です」の繋がり	240
六.	おわりに	242

第二章

	歌舞伎台帳に見る助動詞「です」の様相	
	——その意味と使用意図に関して——	249
一.	はじめに	249

二.	「男伊達」の定義	250
----	----------	-----

三	資料と分析方法	251
四	歌舞伎台帳に見る「です」	253
五	歌舞伎台帳に見る「です」の使用の特徴	261
六	歌舞伎における「です」の使用意図	263
七	おわりに	265
	第三章	
	明治初期の小新聞に見る助動詞「です」の様相	269
一	はじめに	269
二	調査方法	269
三	明治初期小新聞の投書者	270
四	小新聞に見る「です」の様相	273
五	三紙に見る「です」の比較	284
六	おわりに	288

第四章

	明治初期の大新聞に見る助動詞「です」の様相	
	——明治初期の小新聞との比較から——	293
一	はじめに	293
二	大新聞五紙の成立	294
三	「新聞欄」、「投書欄」に見る「です」の活用別出現数	295
四	小新聞との比較	301
五	他の丁寧な断定表現との比較	303
六	おわりに	306

第五章

	洋学会話書に見る助動詞「です」の様相	311
一	はじめに	311
二	洋学会話書の「です」	312

第六章

	明治期における助動詞「です」の普及	
	——演説速記資料を中心に——	329
一	はじめに	329
二	本稿のねらい	329
三	速記本の口語資料性に関して	331
四	調査対象の講談速記資料について	332
五	講談速記に見る「です」	335
六	落語速記本に見る「です」	346
七	「です」の普及過程	349
八	おわりに	351

第四部 その他の断定表現

第一章 江戸語における「でございます」

361

一	はじめに	363
二	江戸時代の資料に見る丁寧な断定表現	364
三	明治以降の資料に見る丁寧な断定表現	386
四	おわりに	388

第二章

	遊里における「であります」の使用意図	
	——江戸後期の洒落本、人情本の調査から——	393
一	はじめに	393
二	人情本に見る「であります」	395

三. 洒落本・滑稽本に見る「であります」	398
四. 「であります」の使用時期と使用者	400
五. 遊里の「であります」の使用意図	401
六. 明治以降の「であります」	405
七. おわりに	407
第三章 文末表現「げす」の評価に関して	411
一. はじめに	411
二. 「げす」に関する記述	412
三. 「げす」の用例	415
四. 「げす」の使用者と評価	422
五. おわりに	423
結び 断定表現体系の変遷	
——江戸語から東京語へ——	427
あとがき	433
論文初出一覧	435
索引	439

第一部 断定表現研究序説

葉遣いになっている。

・仕る

13 ば、 (略) 百七ツの帯解でも祝はうといふいけ年仕つて、(略) (婆文字↓豊ねこ) 三編卷之上

14 点兵衛 何やら多用でござりまして、御不沙汰仕ります。御新造さまは御機嫌よろしう (点兵衛↓鬼角) 四編卷之上

15 けち (略) 早速吸口と仕るぢや (けち兵衛↓商人) 四編卷之中

13は芸者の婆文字が客の言葉を引用している場面で、客は婆文字に「いい年をして」という意味で「いけ年仕つて」と言っており、婆文字の行為に仕るを使い、客自身の威厳を高めている。14は、点兵衛が俳諧師鬼角に丁寧な言葉を用いている場面、15は上方者のけち兵衛(けち助)で、三馬が「江戸者の商人は言するどく、上方者の買手は言やさしく聴ゆるゆゑ、物陰より立聴けば、賣人と買人と取違さうなり」と述べている上方言葉の中に見られる。

・ましてござる

16 ばんとう イエサ、貸切といふ訳は、店向のお方々に戸棚を皆貸てござりますから、お脱なさる場がござりませぬ。(略)(番頭↓生酔) 前編卷之下

17 ばゞ (略) アイ、そりやアわたしが見上げて居やす。能かと思つて大勢の人さまも聞てござる (ばゞ) 二編卷之下

18 下女 迷子札さ。是は何と書てござりますエ。小判で能ネ。(下女↓徳松) 四編卷之下

『浮世風呂』では、「ましてござる」の形は見られなかったが、同形の「動詞連用形+て+ござる」の形が見られる。16は生酔に、18は徳松に対する丁寧な言葉遣いの中で、17は、「聞く」の主体としての第三者に対する尊敬の意味で使用されている。

以上から、三馬が「本江戸」の内容として述べた言葉が、文化年間の『浮世風呂』の町人の会話の中で、すでに使用されていたことがわかる。これらの会話の共通する点は、かしまった場面や、公に向かつて述べられた言葉の中で使用されている点である。

殊に『浮世風呂』の用例で注目すべきは、上層町人のみならず、下層の町人までが、ある程度このような公的な言葉を使いこなしていたことが窺われる点である。09の下女おおべか、お丸は、小松寿雄(二九八七)での分析から下層とされており、会話を見ても音訛がきつい。しかし、「モウくくく内に居ると、あなた、どう遊ばせ、斯遊ばせでおそれぬかせるのう。しみ眞実否だ。」とおかべが嘆いているところから見て、奉公先では改まった言葉遣いに甘んじていたと考えられる。

三馬が『狂言田舎操』の中で「本江戸」という言葉をどのような意識で述べたかは明らかではないが、「江戸に生まれたお歴々」という記述より、武士を意識していた可能性は高い。しかし、「本江戸」の内容となる「然様然者如何いたして此様仕りましてござる」という言葉は、文化年間の町人同士の改まった会話の場面ですでに使用されており、しかも、それは上層町人のみならず、下層町人でも使用できる言葉であった。『浮世風呂』に見る具体的な用例から「本江戸」を考えれば、当時の江戸の町人が上下の階層を問わず、改まった場面の中で共通に使用される言葉の中に、「本江戸」の断片として示された言葉が含まれていたということになる。

二四 講義の言葉

二四一 「文化語・教養語」としての講義の言葉

東京語の基盤となる江戸語を追うもう一つの考え方に、講義・説教・口上等の言葉があげられる。中村(一九四八a)では、東京語を江戸語と比較し、次のような相違点をあげている。